

■書評

世界俳句における夏石番矢

——『夏石番矢の詩的業績』論

木村 聡雄

世界に向かって俳句という詩形を発信し続けている夏石番矢を世界はどのように読み、その俳句の本質をいかなるものと捉えているのか、それこそ本書が明らかにしようとしている主題である。『夏石番矢の詩的業績』は、サントシュ・クマール編集により、サイバーウィット社（インド／2009年）から出版された英文評論集で、世界各地からの16名の俳人・批評家による夏石番矢論が収録されていて、世界俳句論としても多くの人々に読まれるべき書物である。しかしながら本書が海外出版物である点を考慮して、ここでは、急ぎ足になることを承知のうえで、評論それぞれの主張をできるかぎり伝えるべく進めて行くことにしたい。

評論集は、前置きとして編者クマールの序文、夏石番矢の略歴と書誌、次いで2009年にフィンランドの「ラフティ国際作家再会会議2009」で行われた夏石番矢の講演「地平を越えた俳句」が掲載されている。夏石は講演で、季語や定型を用いなくとも俳句は成立すると述べ、俳句は簡潔な形式でありながらも大きな広がりを持った芸術宇宙を創り出す詩であると結んでいる。それでは評論に光を当ててみよう。

ペータル・チューホフは、ブルガリアの詩人・音楽家である。彼の「滝と涙の海との間で」は、世界俳句とはいったい何かという問いの中で夏石作品を解明しようとした優れた評論である。チューホフにとって、俳句とは人と人とを結びつけてくれるものであり、世界俳句は互いに自由な精神でつながったものである。夏石の俳句は季語の代わりにキーワードを用い、超現実主義とも関連があるがそれはほんの一部分にすぎないと語る。夏石句においては、俳句はもはや「今、ここで」を表すものではなく、「常に、どこにでも」あるものである。海外でよく語られる「俳句的瞬間」は、夏石においては「俳句的永遠性」へと変容していると論じる。ところで、何をいかに書くかは詩人／俳人の自由精神によるものであると、その点で詩人は創造者である。夏石の初の英語句集は『未来の滝(A Future Waterfall)』であったが、「滝」とは天と地上とを結ぶ象徴である。天から滝を下って降りてきたこの創造主は、やがて法王に転身して再び空を飛ぶとチューホフは述べる。「未来より滝を吹き割る風来たる」(『未来の滝／メトロポリティック』)には、滝を時間の扉として捉え、その戸を超えてくる未来からの風にチューホフは永遠性を見る。また、「舌の上に寺院あらわれアレグロ」(『未来の滝／人体オペラ』)では、内的現実を描くことを通して国や地域に束縛された俳句を克服したとする。夏石のめざす世界俳句とは、一俳人の周辺の自然や社会状況のみならず、普遍的な詩人の言葉をもって、国、文化、内的・外的現実、時間、地球や宇宙などあらゆるものを統合した境界の交差点であるとチューホフは結論している。

サントシュ・クマールは本書の編者であり、インドの詩人、短編作家、編集者である。「夏石番矢の詩——序論」と題された評論では、『世界俳句』や『吟遊』その他に掲載された何人もの評論などの資料を駆使して、夏石俳句の読みを実証的に示そうとする。クマールは、夏石が単に自然や季語にこだわることなく、人間性そのものに焦点を当てて書いて

いると述べている。夏石が日本語の五七五定型の重要性を説いていることにも言及しつつ、日本の現代俳句の無季論については、キーワードを用いることで夏石は季語の制約から解放され、俳人自身の表現を可能にしたとする。一方、何気ない瞬間を書くのが良い俳句ではなく、そこに哲学などが反映されているべきだとクマールは主張する。「仏陀は裸 極彩色の無に囲まれ」(『無限の螺旋』)は、仏陀の悟りを描き、「極彩色の無」が永遠への旅を象徴すると言う。「ランボーのさすらいは円 空飛ぶ法王」(『空飛ぶ法王』)の句では、夏石は法王の仮面を通して自身の瞑想的経験を示すとする。『法王』は人間精神の奥深い秘密を垣間見せるものと捉え、法王の句に示された風刺、反自然、メタファー、哲学などその詩的モチーフを明らかにしてゆく。また、夏石が世界を旅する様子には、芭蕉の行脚を重ねて見ている。

アダム・ドナルドソン・パウエルはノルウェー在住の多言語作家、批評家、ヴィジュアルアーティストである。彼の「現代世界俳句」は多角的な視点から、日本の俳句との関係において夏石作品の全体像を浮かび上がらせようと試みる。まず、世界俳句に見られる多言語表記による原句と翻訳の影響関係については、それぞれが独立しながらも互いに高め合っているものを成功例としている。『空飛ぶ法王』に関しては、現実と幻想の境を飛び越える点でダリなどを想起させると述べる。『地球巡礼』では認識の方法が示され、『右目の白夜』では視覚の探究が描かれるが、それらは洞察へと至りついには悟りの境地へと読者をいざなうとする。俳句そのものの在り方についても論じられている。伝統的俳句では今なお人間の感情は自然を通してのみ描かれうると主張するが、現代俳句や日本語以外の俳句では、季語の使用にとらわれることなく慣習を自由な感情表現へと広げようとしているとパウエルは述べる。季語の有無に関して夏石句は元来自由だったが、翻訳作品では結果的に原句の五七五定型からも自由となった。夏石は、旧来の俳句に対する知識や技巧も申し分ないにもかかわらず、そこに留まることなく、俳句国際化も含めて、新たな精神の表現を求めてさらなる高みを目指していると結んでいる。

アズサクラ・ザラストラは、ロシアの哲学者・神秘詩人で、そのニヒリズム思想を基に、「死・死は俳句」というタイトルからも伝わるような特異な評論を載せている。俳句の極端な短さに、武士道や腹切、特攻隊などの死のイメージを重ね合わせて行く。『空飛ぶ法王』は反キリスト教の書であり、禅の無の境地から読み説くべきものとも主張する。

ジョゼフ・S・スペンス・Srはアメリカの詩人である。「空飛ぶ法王と無限の螺旋論」では、二つの英語句集を同時の観点から検証している。『空飛ぶ法王』は善なる神についての作品であり、カトリックのみならずあらゆる宗教へとつらなるものという。一方『無限の螺旋』は、俳句と『万葉集』との橋渡しをする作品と捉える。

リン・スローニンはアメリカの詩人で、「空飛ぶ法王の詩人」という論では、句集の作品を読み解いて、この句集の文学的意義を追求する。メタファーの普遍性を論じ、ペーソスやアイロニー、滑稽を指摘する。特に心を動かされた句として「空飛ぶ法王下着は枯葉でできている」を挙げ、ここには自然(枯葉)とユーモア(下着)との対比があると論じている。法王は詩人の姿を借りて、人間性と神性との終りの無い円環性を詠むと述べている。

マグダレーナ・デイルはルーマニア俳句協会に所属で、言葉の重要性に焦点を当てている。子規が新時代を開いたように、夏石は東洋の俳句で彼は世界を包み込んだと論じる。夏石俳句に用いられる言葉は、世界を包含するべく選ばれたものと語る。

パトリシア・プライムは、ニュージーランドの俳句誌やウェブマガジンの編集者で、夏石句集の内的主題を探る。まず、翻訳では日本の俳句を真には理解できないという夏石の言葉を引用し、それを認識したうえで夏石論を進めてゆく必要があると言う。『無限の螺旋』の前半は「意味の旅」、後半は「外側への旅」と読む。夏石は自然と人間性を観察し、精神性へと向かって行く。『空飛ぶ法王』は、優しさと無関心、ユーモアと皮肉との混合という。

ポール・フロイゲル Jr.は台湾在住で、俳句誌「ロードランナー」の編集者である。「法王は飛ぶ」という論では、グローバルゼーションとしてのユダヤ・キリスト教の理想から、近代化まで論じ、ここに見られる自己投影の面について指摘している。

マックス・ヴェルハルトは、オランダ俳句会元会長である。オランダの俳句はいまだに日本の伝統的な俳句観が中心だと語りながらも、夏石句の本質に迫ろうとする。『空飛ぶ法王』については虚構と事実との融合と捉えて、『未来の滝』でも見られたシュールな精神のイメージが法王によってひとつに結び付けられたとする。一方、『無限の螺旋』では、夏石はひとつの現実から我々を目覚めさせ、また別の現実へといざなうとしている。

フロリアナ・ホールは、アメリカの詩人、ノンフィクション作家で、彼女自身は、俳句とは日常について書き、季節や自然への言及を含むという伝統的な立場をとる。その「空飛ぶ法王論」では、生命のあらゆる形について想像力を駆使して描いているとして、夏石句の形を日本的なものアメリカの現代的特徴の統合と考える。

鎌倉佐弓は、「夏石番矢と安井浩司」で両者の文学的接点について例句を挙げて詳細に論じている。一方、ルーマニアの俳人ヴァシーレ・モルドヴァンは、夏石と一茶とを比較する。自伝作家・詩人のスージー・パーマーは、「夏石番矢の精神の旅」で『螺旋』と『法王』を論じている。ニューヨークの詩人ロード・ガルジアニーは「無限の螺旋」論を書き、ルーマニアの俳人ヴァレンティン・ニコリトフは「地球巡礼」論を語っている。

この評論集では、夏石番矢の作品論とともに、日本の俳句についても伝統的なものから現代的なものまでよく研究され的確に批評されている。EU 初代大統領も俳人であることが報じられているが、俳句は世界文学のひとつとして確立しているのである。本書では夏石番矢の海外出版句集の大部分について言及されているが、その中でも『法王』論の多さが印象的である。ローマンカトリックと夏石の書く法王との関係をいかに（肯定的／否定的どちらに）捉えるにせよ、ある意味においては法王とは、事実上単に一宗派に留まらず世界に共有された宗教的存在であり、それを主題として取り組んだ夏石の作品群の詩的成果については、傑作として批評家の誰もが賞賛を惜しまない。ここには世界が捉えた夏石番矢の作品の本質が示されている。そしてそれはまた、現代世界俳句の一到達点の記録とも言えるものであろう。